序　文

本県は人がすみついてからの歴史が古く，かつ人口密度も高い。そのために原生的自然は少ない。しかし，近代までの人の生活は自然にとけ込んだかたちで行われていたために，自然の破壊の度合いも少なく，破壊の程度も自然が十分回復できるレベルのものであった。人の生活基盤である農耕には，寺や神社が関わる農耕儀礼が中心的な役割を果たし，社寺林は聖域として，近年までそのほとんどが自然な姿で守られてきた。また，雑木林を中心とする里山環境も適度な管理を受けながら維持されてきた。しかし，この数十年間にもたらされた人里環境の激変により，鎮守の森や里山に依存した動植物は，その多くが絶滅の危機に立たされている。

このたび本県で絶滅に瀕した野生動植物種（レッドデータ種：以下RD種と記載）の選定を行うに当たり，その基本をどのような点に絞るかが議論された。我が国は南北に２千km余の国土を持ち，多様な生物が生息していることはよく知られている。その中で現在絶滅の危険がある種は国として何らかの注意を喚起する必要がある。これが環境庁版RD種である。しかし，国レベルでは種の指定または広い範囲での生息地指定をすることはできても，具体的に生息範囲そのものを保護するといったことは，多様な国土に対して行うことには無理がある。面積が５千km²程度の県土でRD種を指定することの意義はそこにあると考える。つまり，種名をあげ，特定の場所，面積について具体的に記載することで，その種に対する人々の注意を喚起し，保護の実をあげる効果があると考えるのである。もちろん，種によっては生息地をあげること自体が絶滅を招来する危険性があることも，残念ながら事実であるので，それについては検討会では十分な注意を払った。

このような考え方を検討会では生息地中心の発想，ハビタット主義と呼んでいる。そのために作業は植物群落の調査を柱の一つとした。自然度の高い植物群落を取り上げ，そこに生息する動物や植物の種をリストアップし，検討しようとの考えである。一般に自然度の高い群落は生物多様性もほかと比べて高いとの考えがその背後にあることは勿論である。しかし，重要な種はそのような植物群落以外にも生息していることもまた事実である。例えば，淡水や汽水などの水域やその周辺地に生息する生物や行動域の大きな動物などである。したがって，調査は各分類群毎にも個別に行われた。

生物多様性の高い地域を重点的に保全しようとする考え方を，世界の保全生物学者はホット・スポットの保全とよんでいる。そして，その方法が最も効率的に保全目標を達成する途であるとしている。Myersら(2000)は，この考え方にたって地球上のホット・スポットとしてカリブ海，スンダ列島，中南米，ブラジル，ニュージーランド，南中国など25カ所を選んでいる。この考え方は大きな尺度では地球規模で，ずっと小さな尺度では県レベルでも適用可能である。ハビタット主義とは県レベルでのホット・スポットを定めようとする試みとも理解できよう。

国際自然保護連合(IUCN)の絶滅の恐れのある種の保護を検討する委員会(SSC)では1994年に新しい基準を設定し，我が国のその後のRD種の選定もほぼこの基準に従っている。新基準はひとくちに言えば各種のメタ個体群を認識し，その絶滅確率を計算することで，従来定性的でしかなかった基準を可能な限り定量化し，保全の計画を立てるためのものである。確率の高い種ほど絶滅の危険性が高いとするのである。この新基準は我が国でも採用されており，環境庁から新基準で見直したRD種リストが動植物について各分類群毎に発表されている。もし，この新基準を本県でも採用するとすれば，各種についてメタ個体群を確認する作業から始めなければならない。しかし，このことは言うはやすく行うには多大の困難を伴う。メタ個体群の確認された自然個体群の資料はほとんどの種についてまだ存在しないのが現状である。そこで，本検討会では新基準の中の定性的要件を主として採用して種を抽出し，希少性の判定を行っている。

平成１３年３月

福岡県希少野生生物調査検討会会長　小野勇一

委員名簿

① 検討会委員（50音順，◎は検討会長）

◎小野　勇一　九州大学名誉教授
熊谷　信孝　元福岡県立田川高等学校教諭
倉本　　満　福岡教育大学名誉教授
武石　全慈　北九州市立自然史博物館学芸員
冷川　昌彦　福岡大学附属大濠高等学校教諭
松井　誠一　九州大学大学院農学研究院助教授
松隈　明彦　九州大学総合研究博物館教授
嶺井　久勝　九州大学大学院農学研究院助手
森本　　桂　九州大学名誉教授
矢田　　脩　九州大学大学院比較社会文化研究院助教授
吉田　博一　元中村学園短期大学教授

② 編集委員会委員（50音順，◎は委員長）

武石　全慈　（前出）
土肥　昭夫　九州大学大学院理学研究院助手
◎冷川　昌彦　（前出）
松隈　明彦　（前出）
矢田　　脩　（前出）

③ 分科会委員（50音順，◎は分科会長）

1. 植物群落分科会

猪上　信義　福岡県森林林業技術センター
熊谷　信孝　（前出）
神崎　　巍　元福岡県立築上中部高校教頭
斉城　　巧　福岡県立夜須高原記念の森管理センター
笹富広一郎　財団法人九州環境管理協会
須田　隆一　福岡県保健環境研究所
神野　展光　福岡教育大学教授
◎冷川　昌彦　（前出）
宝理　信也　八女学院高等学校教諭

2. 維管束植物分科会

大野　睦子　北九州自然史友の会会員
◎熊谷　信孝　（前出）
須田　隆一　（前出）
筒井　貞雄　福岡植物研究会代表
牧　　雅之　東北大学大学院理学研究科助教授
益村　　聖　元筑後市立羽犬塚中学校教諭
真鍋　　徹　北九州市立自然史博物館学芸員
横枕　保徳　福岡県立黒木高等学校教諭

3. 哺乳類分科会

荒井　秋晴　福岡県立九州歯科大学講師
池田　浩一　福岡県森林林業技術センター専門技術員
大平　　裕　財団法人九州環境管理協会
白石　　哲　九州大学名誉教授
土肥　昭夫　（前出）
馬場　　稔　北九州市立自然史博物館学芸員
◎吉田　博一　（前出）

4. 鳥類分科会

井上　裕司　日本野鳥の会北九州支部会員
江口　浩喜　日本野鳥の会福岡支部会員
岡部　海都　日本野鳥の会福岡支部会員
小副川直喜　日本野鳥の会筑豊支部会員
後藤　文嗣　日本野鳥の会筑豊支部会員
◎武石　全慈　（前出）
武下　雅文　日本鳥学会会員
林　　修　日本野鳥の会北九州支部会員
広塚　忠夫　日本野鳥の会筑豊支部会員
増田　智久　日本野鳥の会福岡支部会員
松富士将和　日本野鳥の会福岡支部会員
溝田　泰博　日本野鳥の会福岡支部会員
皆合　直樹　日本野鳥の会北九州支部会員
山根　三男　日本野鳥の会福岡支部会員

5. 両生類・爬虫類分科会

◎倉本　　満　（前出）
橋元　浩一　日本蛇族研究所特別研究員

6. 淡水魚類分科会

稲田　善和　福岡県水産海洋技術センター内水面研究所
木村　清朗　元九州大学教授
高比良光治　財団法人九州環境管理協会
高山　賢治　福岡県朝倉地域農業改良普及センター
竹下　直彦　水産大学校講師
田島　正敏　佐賀県立宇宙科学館
橋本　哲男　福岡県立田主丸養護学校教諭
淵上　信好　建設省遠賀川河川環境保全モニター
◎松井　誠一　（前出）
籔本　美孝　北九州市立自然史博物館学芸員

7. 昆虫類（鱗翅類）分科会

井手　定雄　元九州大学職員
井上　準一　博多昆虫同好会会員
上田恭一郎　北九州市立自然史博物館学芸員
上田　將人　（故人）
小田切顕一　九州大学大学院比較社会文化研究科大学院生
景浦　　宏　福岡大学大学院理学研究科教授
川上　太朗　博多昆虫同好会会員
佐々木公隆　九州産業大学付属高等学校教諭
新海　義治　北九州自然史友の会会員
福田　　治　博多昆虫同好会会員
溝部　忠志　福岡市立鳥飼小学校教諭
森田　公造　日本鱗翅学会会員
◎矢田　　脩　（前出）

8. 昆虫類（甲虫類ほか）分科会

紙谷　聡志　九州大学大学院農学研究院助手
城戸　克弥　太宰府市立水城西小学校教諭
藤本　博文　元九州大学理学部生物学科
松井　英司　熊本県立荒尾高等学校教諭
◎森本　　桂　（前出）

9. 陸・淡水産貝類分科会

魚住　賢司　日本貝類学会会員
澄川　精吾　福岡女子大学名誉教授
泊　　秀治　福岡貝類同好会会員
本多　庚午　福岡貝類同好会会員
◎松隈　明彦　（前出）
宮崎　晋介　住友金属株式会社
百崎　義隆　福岡貝類同好会会員

10. 淡水産動物分科会

小野　勇一　（前出）
原　　誠　福岡県立福岡高等学校教諭
逸見　泰久　熊本大学理学部講師
松井　誠一　（前出）
◎嶺井　久勝　（前出）